
闇の中

岸川溥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇の中

【Nコード】

N1751Y

【作者名】

岸川 漣

【あらすじ】

あれから半年、組織を破滅して、二人とも元の姿に戻った。

新一は蘭の元へ行き、幸せな生活を取り戻しつつあった。

すべてが元に戻って、すべて幸せになれた、そう思っていたが、一人、まだ闇の中に取り残された人がいた。

志保は、新一の事を好きだったがそれを言うべきではないと感じ、いえずにいる

ずっと精神安定剤を手放せず普通に生活できない・・・。

そんな闇の少女を救ってくれたのは、一人の怪盗だった・・・。

快志ですが、新志もあります

プロローグ

「はあ・・・はあ・・・いやああああつ・・・！」

8畳半の部屋に悲鳴が響いた

「ゆ・・・め・・・」

一人の女性がベッドから起き上がり、机の上においてある薬を一錠飲んだ

「コレがないと、普通に暮らせないなんてね・・・」

精神安定剤だった・・・

そのとき、ドアが開いた

「大丈夫か志保君・・・」

「ええ・・・」

今薬を飲んだところ・・・

また・・・寝るわ」

ドアを開いた人間はそのことを聞いて安心したかのようにドアを閉めた

女性は暗闇の中ベッドに戻り、また眠った

毎日コレを繰り返す

安心して眠る事が出来ない女性・・・

でもそんな事を知らずに毎日を笑顔ですごせる二人・・・

この3人の違い・・・

切なきスガタ

朝日に照らされ目が覚めた

どうしても朝気持ちよく目が覚めない

その理由は恐らく、夜中薬を飲むからだろう

私は着替え、リビングへ行った

「おはよう志保君」

「おはよう・・・」

私は何気なく時計を見た

7時半だった

あの人に来る時間・・・・・・・・

私はキッチンへ行ってお茶を注ぎ、それをもってソファーに座った

「志保君は、今日も研究をするのかね？」

「ええ……」

FBIに完成させてくれって頼まれているから……」

「そうか……」

研究……」

組織を破滅して私が元の姿に戻った時、薬を完成させてくれとのFBIからの依頼があった

あの薬はまだ完成しておらず、あのボスはその時自殺をしたため薬の目的は闇のまま

あの薬のデータは初めからあって、元は完成した薬だったものの、私の両親が亡くなる数日前にすべての薬を焼ききってしまった、薬そのものはなくなった

ただしボスが持っていた薬のデータを元に私に薬を作らせていた

でもその薬のデータはとても膨大なもので、USBメモリがひとつ埋まるぐらいのデータで私が薬を作れといわれたときから私が組織を抜けるまでの間に3分の1ほどしか完成していなかった

そしてFBIにそのデータを元に完成させることが出来たら、その薬をFBIに提出して欲しいと頼まれた

その薬の効果を調べてみるらしい

ということでは私は四六時中薬の研究を続けている……

組織にいた頃と変わらない……

私はよく思う

でも、これは私に依頼されたとき、やるのかやらないのかといわれ、私がやるといったものだから、私がやらなければいけないことだった……

「はよあゝ」

最も会いたくない人間が来てしまった……

工藤君だった……

彼はいつもここで朝食をとっていた

「宮野く朝飯」

「ここは食堂じゃないの・・

自分の家で食べなさい」

「いやじゃねえか

オメエの作る朝飯ちゃんといういろいろ入ってて体にいいし」

「フランス料理を作っているわけじゃないわ

簡単だから自分で作りなさい」

「料理が出来ない」

「蘭さんに教えてもらえばいいでしょう」

「んなこといやからくれよ」

「テーブルの上にあるものを食べるか、餓死しなさい」

「コワッ……」

でもそんな事をいいながらちゃんと用意してくれてるじゃないか

「私たちのものあまりものよ

どうせ私たちのものだって昨日作ったものなんだから

「ふうん

にしてはうめえな

「あつそ

私、いらなから

「ちゃんとしたものあるのに自分はたべねえのかよ

もったいねえ

「あらそつ

「可愛くねえ

「……………おとと食べて学校に行きなさい」

「へーへー」

「ごちそーさまでした」

どーせそこに蘭が待ってるから、いくよ

「じゃーな」

「……………」

『蘭』という彼の口から出てくる単語に心を刺されるような気がする

彼は元の姿に戻ってすぐに蘭さんに告白し、付き合い始めた

あの日、工藤君の告白をする場を見て、泣きそうになって家に向け

戻った

とても恐ろしかったから・・・

切なきスガタ（後書き）

快斗くんがでない・・・

嘘

私は昼まで研究をしていて、博士は今日から北海道で学会があるらしく、家を空けている

私は昼になり、朝ごはんを食べていない事に気付いてリビングの下りてきた

ピンポン

チャイム……

今日は誰も来る予定なんかないはず……

そう思いながらインターホンにつながる受話器をとった

「はい……」

「あ、志保ちゃん

俺俺、快斗」

今日は学校のはずじゃ……

そう思いながらドアを開けた

ドアの先にいるのは工藤君と瓜二つの彼の姿

「入りたければ入りなさい」

「おじやまします」

「あなた何しに来たの？」

今日は学校のはずでしょう？」

「サボリ

テストなんてやってらんねえからよ」

「仕事ばかりで勉強してないわけね」

「だって高校生がテストする時期にだけ仕事がなかったら犯人は高校生だってあのバカな警部でも気付くだろ？」

「もう父親を殺した人を見つけたんだから、やめにすればいいのに。」

「でももうたいしたことはしてないよ

空飛ぶくらいだから

「あ、そ」

「ところで工藤は？」

「バカね、あの人は学校よ

行かないとガールフレンドに殴られるって言ったもの

「なるほどねえ・・・」

俺にもそんなガールフレンドがいるんだけど、フレンドに出来るほど同じレベルじゃないんだよ

やっぱり志保ちゃんと話していると気楽だなあ・・・

「どっしてよ」

「わかんない・・・」

でもコレだけはいえるよ・・・

志保ちゃんは、工藤の事が好き・・・そうでしょ？

「.....」

「その顔は凶星かな？」

「ちがうわ！！」

どうして私があんな人を・・・」

「嘘をつきたければつけばいいよ？」

その分苦しくなるのは自分なんだからさ」

「・・・っ・・・」

何よ・・・そんな事言いに来たわけ？

だったら帰りなさい」

「ちよ・・・志保ちゃん！」

私は返事をしなかった

出来なかった・・・

もしこれ以上の事を聞かれたら、隠し通せる気がしない

もうどうでもいい・・・

私から何が離れていこうと、元々私にはそれを持つ価値などないのだから・・・

ゆめ

私は地下室に戻り、寝ることにした

もしかしたら黒羽君は帰らないで待っているかもしれないと思った

でも追い出す気にもなれなかった

「ほ……ば……し……志保……志保……志保……」

「…………お姉ちゃん…………？」

「やっと起きた……」

「え……ちょ……こ……ど……」

「どうしたのよ……」

「それはこっちのせりふ

今日は私たちに自由が来た日でしょ？

なのに志保途中で昼食食べながら寝ちゃって

今起きたの」

「……え……だって……だって……おねえちゃんは……」

「ん？」

「ちょっとまって……組織は？」

「はあ？」

何馬鹿なこといつてんのよ

もうつぶれて、私たちの取調べも終わって、やっと自由が来た日じ

やない」

「で・・・も・・・私・・・

今までの・・・なんだったの？」

「さあね

早く食べて

まだ行くところあるんだから

「うん・・・」

「行く」

「ええ・・・

ここから人ごみになるから私についてきてね」

そういつて姉は人ごみの中にまぎれてゆく

「ちょ・・・ちょっとまって・・・」

なんとか背中を目で追うのが精一杯

「ちょっとま……って……」

いなかった……

やっと再会できたはずの姉はもう……

「すみません……連れがいなくなっちゃって……」

呼んでももらえますか？」

「……わかりました……」

お探しの方のお名前と、あなたの名前を教えてくださいませんか？」

「私……宮野志保というものです……」

探してるのは……宮野明美という人なんですが……」

「わかりました……」

「いない・・・みたいですね・・・」

「そんな・・・」

「だって・・・宮野明美さんは亡くなったじゃないですか」

「・・・え・・・？」

「だって・・・さっきいつしよに昼食を食べたんですよ?!」

「だって、今日のニュースで大きく報道してたじゃないですか」

半年前におこった10億円強奪事件は最近発見された組織の仕組んだもので、その主犯の広田雅美は、本名・・・宮野明美と」

「そんなっ・・・」

「しかも死体も見つかってもうすでに火葬もされている

いるわけ・・・ないじゃないですか」

そんなわけない・・・

私はその部屋を飛び出していた

するとそこには何も無い

ただ霧、霧、霧だった

「なんで・・・？なんでなにもないのよ・・・っ・・・」

私は元いた部屋に戻った

そこには・・・

「シエリー・・・よく生き残れたなとほめてやりたいぜ・・・」

「ジンッ・・・」

「でもそれも今日で終わりだ

絶対に夢を見てしまう

それも決まっつて、よくない夢

「志保ちゃんっ……………」

「はぁ…はぁ…はぁ…黒…羽…くん……………」

「大丈夫…なわけないよね…」

私はゆっくりとベッドから出て机の上の薬を飲んだ

「これっ…………精神安定剤……………」

「工藤君には言わないで

お願い 他言しないで……………」

「…しないけど……………」

「ずっとなの」

居眠りでも少し眠ったらすぐ・・・

コレがなかったら・・・生きていけない・・・」

「志保ちゃん・・・っ・・・」

志保ちゃんさ、それでも・・・そんな風に生きてて、楽しいの?」

意味

「……………」

私にはよくわからなかった

その言葉の意味すらも・

「……………」

「……………」

じゃあさ、志保ちゃんは一体何のために生きてるの？」

「……………」

言われてみると……何のために生きているわけでもないし……楽しいわけでもない……」

「……………」

黒羽君に抱きしめられていた

「……………」

「志保ちゃん・・・好きだよ

同情とかじゃなくて、志保ちゃんが」

語られるたび腕の力は強くなる

「ちよつとま・・・」

言いかけたそのとき・・・

私の位置から見えた

工藤君が・・・入ってきた・・・

「ダメッ・・・」

「いいよ・・・

どうせなら、見せ付けちゃおう？

名探偵

「宮野・・・黒羽・・・」

「なあんだ新ちゃん帰ってきちゃったんだあ」

「母さんの声使っな

どっいっことだよ」

「どっいっこともどっいっこともないでしょ？」

見ての通り

名探偵、君になら分かるよな？」

リビングの中は騒然となる

私はまだ黒羽君に抱かれたままだし、工藤君は突っ立ったまま何も言っていない

「何？何か不満ある？」

私はまだ黒羽君の胸に押し付けられているところを見ると、きっと私は口出しするなという事なのだろう

ジリリリ・・・

「あ、っざんねーん

もーちよつと志保ちゃんといたかったけど、もう時間みたい

じゃあねー」

黒羽君は私をそつと離して、手を振った

「後で電話するから」

そういつて出て行った

「どづいづことだよ・・・」

消え入りそうな弱々しい彼らしい声ではなかった

「どづいづことだよ・・・」

「あら、彼の言ったとおり

シャーロックホームズの名に傷がつくわよ

男女が抱き合っているのを見ても何もわからないなんてね」

「おいつ……」

「……」

私は答えなかった

いや・・答えられなかった

これ以上この人と話していたら、私の感情が耐え切れなくなったド
アを突き破って噴出してしまいそうだったから

私には、背を向ける事しか出来なかった

す、き

夜7時

工藤君は懲りて出て行ったみたいだった

ブルルルル

「はい・・・」

「あ、志保ちゃん？

今からそっち行くけど、大丈夫？」

「ええ・・・

誰かさんもとつくの昔に行ったみたいだし」

「わかった」

彼は数分してすぐに家に来た

ベランダ、から

「志保ちゃんさ、やっぱり工藤のこと好きなんでしょ？」

「違うわ

「工藤君のことなんて好きじゃないし、なんとも思っていないわ」

「ふうん・・・」

「じゃあさ、なんでいつも工藤に会ったびそっけなくなるの？」

「っ・・・それは・・・」

「言葉をかけられて反応するという状況を作らないためでしょ？」

「そうならないように最初からよけておくんだよね？」

「ちがつ・・・」

黒羽君に引き寄せられ黒羽君の胸の中に入った

「ねえ、そんな肩こる奴やめとこつ」

背伸びなんて、所詮背伸びなんだから

突き放せなかった

「志保ちゃん、好きだよ」

その言葉をかけられるたび、私の心に突き刺さる

「ね、え・・・」

「ん？」

「一人に、しない？」

怖い・・・

一人ぼっちになりたくないって・・・思う・・・

一人に、しない？」

黒羽君は腕の力を強めた

「しないよ

そんな冷たいこと、しない」

「好きっ・・・

私・・・黒羽君が好き・・・」

私はそういつて腕をまわした

嫌だ

「俺は絶対、寂しい思いはさせないよ

絶対に、ね」

「ありがとう」

黒羽君の温もりはどこか、あの人に似ている

きつと、同じ”優しさ”を持っているから

「じゃあ、明日も、くるから」

「じゃあ・・・」

（翌朝）

いつものように、工藤君が何のためらいもなく入ってくる

昨日のことを何も口走らない

「なあ宮野
相談があんだけど」

「何かしら・・・？」

「今週蘭と出かけるんだけど、どこがいいと思う？」

俺ほとんど思いつかなくて、困ってんだよ」

それは、忘れかけていた私に止めをさした

「そんな事、自分で決めなさいよ！

私に聞かないで！」

「あんだよ・・・

そんなに切れんなって」

「さっさと学校いきなさい！

どうしてもわからないならあの大金持ちのお嬢様に聞けば？」

どうでもよかった

誰にこの気持ちがあればようと、もう、取り返しのつかないとこころま
で来ていたから・・・

私は少し興奮してしまうと元に戻りにくくなる

薬を飲んで、落ち着くのを待つしかない

もういやだ・・・

こんな生活・・・薬におぼれて生きてく生活なんてもう、嫌だった

「おい

「何よ

「何だ、それ

「・・・ビタミン剤よ

さっさと出てって

「ふーん

すべて諦めた今も、コレを隠したいという気持ちは捨てられなかった

盗んで

工藤君はそれからすぐ、蘭さんが迎えに来た事で学校に行った

毎朝来ないで欲しい・・・

それがいつもの気持ち

いつも工藤君と会える喜びもあるけれど、その分期待して、忘れられなくなってしまう

いつそ誰もいない、田舎にでも引っ越してもう、死ぬまで会いたくない

そうおもう

私は、悪魔だから

私は、最低な事を考えている

一度考えた

『彼女（蘭さん）を殺せば、たった一人の頼りの私の元に来てくれる』と

『あの女を消せば、すべてが思い通りにいく』と

もう自分の心は、取り返しのつかないところまで、ゆがんでいたら、それを戻す事は、不可能だから・

チャイムが鳴り、応答した

「はい」

「志保ちゃん、俺」

「・・・鍵開いてるから」

黒羽君・・・

「遊びに来たよ

志保ちゃんどうせ一人だろうから」

「一人は慣れてるから、ほっといても干からびやしないわよ」

「干からびるって」

「・・・それより、どうしたの？」

学校抜け出してまで

「あ、わかる？」

「制服着てるから」

「母さんに知られるといろいろ面倒なんでね」

「そう」

「つかれたあ」

「ねえ」

「なに？」

「私を……私を盗んでくれない？」

「……え……？」

わかったよ

「ちょっと・・・それ、誘拐だよ？」

わかってる？」

「ええ・・・」

怪盗キッドとして・・・」

「何のために？」

「どうやって？」

「わけのわからない予告状を一週間前に送って・・・」

私を盗んでくれればいいの

そして、一週間ぐらいで私を戻してくれればそれでいいの」

「何のために？」

「知りたいの」

私が盗まれたら、工藤君がどんな反応をするか、知りたいから」

「忘れられてないんだ」

「コレでどんな反応をするか、わかったら忘れる

今までいろんな方法で生きていない宝石を盗んできたあなたになら
出来るでしょう？

私も、うかつな行動をするから」

「・・・」

わかった

引き受けるよ・・・志保ちゃん」

予告

「じゃあ、お願いね

夜中、工藤君の家のベランダにおりて、予告状を渡して」

「わかった」

工藤はもうすでに家に帰ってきている

夜中、工藤が寝ているところをたたき起こす

夜中12時

とても変わったベランダだから、迷わずにおりれた

パタッ

コツコツコツ・・・

「お久しぶり、名探偵」

工藤の耳元でコレを言えば、絶対に飛び起きるはずだ

「か・・・つか・・・かかか・・・怪盗キッド!？」

「そのとおり」

「何しにきやがった!

ここに宝石なんてないぞ!」

「いえ、今回は宝石をとりに来たんじゃありません

名探偵、あなたを試しにきたんです」

「ためしに・・・?」

「ええ、あなたにとつても近いはずなのに無視している・・・そんな人物を失ったら・・・

どうなるかな?」

「何だと・・・?」

「まだ中森警部にも言ってます

あなたが一番です」

「なっ・・・」

「じゃあな、名探偵

楽しみにしてるよ」

そういつて、俺は予告状を投げ捨て、ベランダからとびたつた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1751y/>

闇の中

2011年11月20日19時47分発行